極楽寺だより

2021（令和３）年８月号

発行所：極楽寺（浄土真宗本願寺派）〒759-3803 山口県長門市三隅下野波瀬3633 ☎0837-43-0625

「盆法会」「平和の鐘を撞きましょう」中止のお知らせ

コロナ禍は、いまだ落ち着きません。このような状況ですし、人の移動が多いお盆ですから、法座を中止せざるをえないと判断しました。本当に残念ですが、何とぞご理解くださいますようお願い申し上げます。

また、例年十五日に行っておりました「平和の鐘を撞きましょう」も中止といたします。

お盆期間中、本堂はお荘厳し、開けておきます。
どうぞ、ご自由に参拝ください。

なお、「盆法会」「全戦争犠牲者追悼法要」「魚供養」のお勤めを、住職・前住職だけで八月十五日朝九時より行います。申し訳ありませんが、参拝はご遠慮ください。

同じ時刻に、各家々のお仏壇にお参りしていただければと思います。

参拝者無しで、お勤めします。
各家々のお仏壇にお参りを。
八月 十五日　朝九時より

お寺からのお願い

納骨堂の参拝についてのお願いです。くれぐれも火の後始末をお願いします。特に、続けてお参りされる場合、ロウソクの火を「次の人のために」と消さないままにされるところに、落とし穴が！結局つけっ放しで危険なことに…。次の方に「ロウソクの火を消して下さいね」と、一言かけていただけると、助かります。

オシエノカケラ

OSHIE NO KAKERA

「よわい」は「つよい」

日本ラグビーフットボール選手会が立ち上げた「よわいはつよい」プロジェクトという活動があります。「よわい」は「つよい」ってどういうこと?と首を傾げたくなるような名称ですが、どんな活動なのでしょうか。

ラグビー選手はムキムキの筋肉のヨロイをまとう、強さの象徴のような存在です。トッププロ選手のタックルは、軽トラックの衝突と同じ威力といわれますから、毎試合軽トラにぶつかりに行くようなもの。さぞや心身共に強く、勇気ある人かと思いきや、実はそうでもないのだとか。周囲から「弱音を吐くな」「自分で乗り越えろ」と言われ、また自身にも言い聞かせていく中で、追い込まれ、心を病む人が多いようです。そんな選手をサポートする為に、「不安な気持ちになったら誰↘

～ OSHIE NO KAKERA ～ OSHIE NO KAKERA ～ OSHIE NO KAKERA ～ OSHIE NO KAKERA ～ OSHIE NO KAKERA ～

かに伝えてみよう」「相談を受けたら、相手を否定せず思いを聴いていこう」という、心の健康を考え、ケアする活動が立ち上げられました。

とはいえ日本は「弱さを見せるのは恥」という文化が根強いですから、助けを呼ぶには勇気がいる。この弱さを受け入れる勇気こそ、本当の強さだと伝えたい。これが「よわいはつよい」プロジェクトなのです。そして他競技のアスリートや、コロナ禍で不安を抱えている日本全体にも広げようと、取り組まれています。

確かに、弱さと向き合うには勇気が必要です。誰しも、情けない自分から目を背けたい。しかも近頃は「自己責任」だと突き放され、自立という名の「孤立」が広がっている時代です。「迷惑をかける者、役に立たない者は生きる資格がない」という空気も生まれ、ますます弱みは見せられません。強さを装↖

東京の築地本願寺が発行する『築地本願寺新報』から、今年も法話執筆の依頼がありました。せっかくですので、極楽寺だよりにも掲載させていただきます。

うヨロイを身にまとい、失敗を恐れ、傷つくことに怯えている。誰かを見下し、叩くことでしか、強い側にいる安心感を得られない。ところが、守るためのヨロイはいつしか助けを呼ぶことを許さない檻へと変わり、自らを追い込んでいくのです。本当は、誰もが心の底では「虚勢を張って生きるのは疲れた」「弱さをさらけ出せる場所が欲しい」と思っているのではないでしょうか。

実はお寺とは、安心してヨロイを外せる場所なのです。なぜなら阿弥陀如来という仏様は、私を決して否定しないからです。親鸞聖人のお言葉に「如来の作願をたづぬれば　苦悩の有情をすてずして」（『正像末和讃』）とあるように、そもそも阿弥陀様とは苦しみ悩む者を救いたいと立ち上られた方でした。弱くても愚かでも捨てないと誓われた、阿弥陀様の願いがかけられている。このままの私が、かけがえのない存在だと認められている。だからこそ安心して弱さや愚かさと向きあえる勇気が、素直に助けを呼べる強さが与えられる。閉じていた心が開かれることで、新たな気づきや出遇いが生まれてくる。まさにお寺とは、阿弥陀様を↘

拠り所に人生を確かなものにされた方々の歴史が刻まれた場所なのです。

以前、法事で法話をした後、長年お寺に参り、仏法を聞いてこられたお婆さんから「今日は良い後悔をさせていただきました」と言われ、驚いたことがありました。私たちは後悔しない生き方を求めているはずなのに、この方は未熟な私の法話を深く受け止め、真摯に自分を見つめている。弱さと向き合い、新たな気づきを得て「良い後悔ができた」と語られる。阿弥陀様を拠り所とした揺るぎない安心感が生む、毅然とした態度としなやかな強さに圧倒されたのです。それは、「よわいはつよい」という姿そのものでした。

弱さを受け入れる勇気こそ、今の時代に必要なものだと思います。ただ、それを自分で手に入れることは難しい。しかしその勇気は、既に阿弥陀様から与えられている。そう気づかれた先輩方の確かな歩みに導かれ、私も育てられています。■

新企画

今回から、新しいコーナーを始めます。
題して『お寺の業界用語』。
日頃耳慣れない、お寺で使われる言葉を知って、
お寺に親しんでいただけたらと思います。
毎回、少しずつご紹介していきます。

庫裡（くり）

「庫裏」とも書きます。
本堂以外の、座敷・事務所・住居部分を言います。

お斎（とき）

法事や法要など、仏事の際の食事のこと。元々は、修行者が決められた時間にとる食事をあらわしていましたが、後に今の意味へと変わりました。浄土真宗では法要の際に、ご門徒同士が自分たちの育てた農作物をお寺に持ち寄り、皆で調理した料理を共にいただくという、お斎文化が培われてきました。

仏事、葬儀、納骨…、わからないことや
困ったことがあれば、極楽寺にご相談ください。
ご遠慮なく、どうぞ　0837（43）0625

極楽寺ホームページ

極楽寺.com で検索を

極楽寺だよりの過去の記事をはじめ、盛りだくさんの内容です。

月々の言葉

Monthly Words

7月の言葉

真宗大谷派の僧侶・宮城顗先生は、「人間は欲深いというが、幸せを独り占めにしたいと同時に、悲しみさえも独り占めしたいものなのだ」と教えてくださいました。「幸せを独り占めにしたい」という思いはわからなくはありません。では「悲しみを独り占めにしたい」とは、どういうことなのでしょうか。

東本願寺で開催された座談会に、宮城先生が講師として参加された時のお話です。座談会のメンバーは、東本願寺に参拝された人たち。様々なところから、年齢層もバラバラな方々が集まっておられます。

その中に、若い人たちのグループがありました。聞くと、グループの中心である女性の弟さんが、病気で亡くなられたのだ↘

Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words

そうです。その後、弟さんの「病気が治ったら、ああしたい。こうしたい」という思いが書かれたノートが出てきました。思いを果たすことなく亡くなった弟が、可哀想で仕方がない。代わりに私が果たしていこうと、その女性は思われたのです。そしてそのノートに「京都の東本願寺にお参りがしたい」と書かれていたのだと。病いの中で、浄土真宗関係の本を読まれたのでしょうか。彼女が、そのことを弟さんの友だちに話すと、「一緒に行きましょう」と言われ、今日参拝したということでした。

彼女は、「これが母親ならもう年も年だし、一応人生いろんな経験もしているから、順序からいっても悲しくてもまだあきらめがつくけれども、自分より若く、ほとんど人生経験もなしに死んでいった弟が哀れでしかたがない。弟を失った悲しみというのは、こんなに辛いものだとは思わなかった」と言われました。

すると、一人で参加しておられた女性が、「これが母親ならと、あなたはそう言われましたが、母を失った悲しみがあなたにわかるのですか。私は、先日母を亡くしました。母を失う↖

ことがこれほどつらいとは、思いませんでした。それで、どうにも生きる力が湧かなくて、本願寺にお参りしたのです。共に過ごす時間が長いほど、思い出も多く、悲しみもまた深いのです。あなたに母親を失った悲しみがわかるのですか」と怒り出されました。そこから座談会そっちのけで、「母親を失ったほうが悲しい」「いや、弟を失った方が悲しい」と言い争いになってしまったのだそうです。

大切な人を亡くす悲しみは、周りの者が評価できるようなものではありません。二人とも、深い悲しみの中におられるのでしょう。ところが二人はいつの間にか、「自分の悲しみの方が深い」と主張し始めてしまった。まさに、悲しみを奪いあい、独り占めしようとされたのです。宮城先生はその時、「人間は悲しみさえも独り占めしたいものなのだ」と思われると同時に、これは二人だけのことではなく、私たちがそれぞれに抱えている、人間の本質なのではないかと思われたそうです。

私たちは悲しみに出遭う時、「どうして私がこんな目に遭わなければならないのか」という思いに陥ります。そして「私が」

という思いが強まると、いつしか「私だけが…」「私の思いが、あなたにわかってたまるものか…」という思いへと変わっていく。まさに、悲しみを独り占めしようとするのです。そのことが、形は違えど同じような悲しみに生きておられる人がいることを、見えなくさせてしまうのでしょう。

このような有り様を、宮城先生は「悲しみが濁る」と言われました。仏教では、煩悩を「濁り」に譬えます。透明のコップに濁った泥水を入れると、向こう側は見えなくなります。同じように、悲しみを「私だけが」という思いで濁らせてしまうと、周りが見えなくなり、ますます自分の思いに閉じこもることになってしまいます。

その濁りを照らし出し、新しい世界との出遇いを開かせてくださるのが、阿弥陀様のはたらきなのだと教えられるのです。濁った泥水も、落ち着くと泥が沈殿し、次第に水は透きとおり向こう側が見えてきます。同じように、阿弥陀様のはたらきに出遇い、立ち止まり、振り返り、落ち着くことで、自分の悲しみを通して、人間がそれぞれに等しく持つ悲しみに目覚めていく。「どうして私だけが」という独り占めの思いから、「形は違っても、あなたも同じような悲しみの中を生き抜いておられるのですね」という出遇いが広がっていく。そこに頷きがあり、お互いが尊ばれ

ていく世界が開かれていく。「私の方が悲しい」という世界から、悲しみを共にしていく身に育てられていくのだと、宮城先生は示してくださったのです。

『阿弥陀経』に「五濁悪世」という言葉が、あります。「五濁」とは、煩悩に濁った世に生きる人々の、五つの相（劫濁・見濁・煩悩濁・衆生濁・命濁）を示されたものです。

「劫濁」とは、時代や社会の濁りということ。

「見濁」とは、ものの見方、思想の濁りです。特に、自分の考えに固執し、私が正しいと主張し、他の考え方に耳を傾けない在り方は、見濁の極みだといわれます。

「煩悩濁」とは、貪り、瞋りが、強く熾んになること。

そして「衆生濁」とは、人々の有り方が衰えることです。自分を深く見つめることもなく、人を深く思うこともなく、人生の方向もわからず、しかもそれが少しの問題にもならずに、ケロッとしている相。

最後の「命濁」とは、人の寿命が短くなるということです。

濁って、向こうが見えなくても…

泥が沈めば、見えてくる

それは、命の年数が短くなるということではありません。生きる喜びが見失われ、生きていることの有り難さが実感できなくなり、互いに尊重することもなく、命の豊かさが薄らいだ状態のことをいいます。（『和讃に学ぶ』宮城顗・『正信偈の教え』古田和弘）

私たちが生きる現代社会を、そのまま言い当てたような言葉ではないでしょうか。もちろん『阿弥陀経』は、約二千年前に書かれたお経ですから、この言葉は人間の世の本質をあらわしているのでしょう。しかし現代社会は、その濁りがますます深まっているように思われます。私たちはまさに、「濁世」を生きているのです。

近頃は、通りすがりの人々を傷つけ、時には死に至らしめる「無差別殺傷事件」が増えています。事件を起こした彼らは、共通して孤独感と疎外感を抱えていたようです。自分の居場所が見出せず、生きる喜び充実感も感じられない。そんな彼らの思いが、そのような形となって噴き出してしまったのかもしれません。

もちろん、事件を起こしたことを肯定するわけではありません。しかし、彼らの悲しみは彼らだけの責任だと、私には思えないのです。「自己責任」という言葉が独り歩きし、迷惑をかけてはいけないという思いに縛りつけられ、苦しみも自分一人で担わなくてはならないような時代です。いや、すべて個人に押

月々の言葉

しつけて、ケロッとしている時代と言っても良いのかもしれません。助けを呼ぶこともできず、悲しみを共感することさえ許されない。そんな濁りが社会を覆っています。

このような社会が、悲しみや苦しみを独り占めにし、濁らせてしまう彼らを生み出してしまった。これは、本当に切ないことだと思います。悲しみを通して、共に苦しんでいる人と出遇い、共に生きることができていれば、また違う形になっていたのではないでしょうか。

「濁世」を生きていることに気づき、悲しみを共にし、分かちあう世界に出遇う。そんな生き方に目覚めよと、阿弥陀様は私たちに呼びかけられているのです。だからこそ親鸞聖人は、阿弥陀様のはたらきを「濁世の目足」、煩悩に濁った世に生きる者の目となり足となるものだと、示されているのでしょう。奪いあい、独り占めにする生き方から、分けあい、共に生きる生き方へと歩み出したいものです。■

古い仏具　使わないお線香
お寺へお持ちください

本堂に箱を用意しています！
正面から入って、右手奥に箱があります。

「古い仏具は、どうすれば良いでしょうか」という問い合わせがあります。基本的には、仏具屋さんにお願いすれば良いのですが、お寺にお持ちいただいても結構です。
また、使われないお線香があれば、お寺で使わせていただきますので、お持ちいただけたらと思います。本堂に箱を用意しています。

8月の言葉

今月の言葉は、悲しみを否定するものではありません。悲しみとは、とても大切なものですから。何より、亡き人を大切に思っているからこそ悲しいのです。大切に思っていなかったら、悲しむこともありません。

近頃は、ゆっくりと悲しむことが、許されなくなってしまったように思います。スケジュールが優先され、人間がスケジュールに合わせて生きていかなければならない時代です。悲しみを尊重することもなく、「いつまで引きずっているんだ」「早く、切り替えて」と言わんばかりにプレッシャーがのしかかってくる。ゆっくりと、じっくりと悲しみを味わうことができない時代になってしまいました。そして、葬儀や法事でさえも、スケジュールをこなすように進められています。

精神医学・精神分析の基礎を築いたフロイトは、「悲哀の仕事」

Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words

ということを言っています。大切な人を失った悲しみを、きちんと悲しむことができないと、人間は精神に支障をきたすのだと。それはそうでしょう。大切な人だから、悲しいのです。「悲しむな」とは、「大切な人を大切に思うな」ということと同じです。そして、悲しめないということは、大切な人を大切に思えなくなっているということなのですから、まさに精神的に支障をきたしているということでもあるのでしょう。

作家の柳田邦男さんは、フロイトの「悲哀の仕事」を受けて「悲しみの感情や涙は、実は心を耕し、他者への理解を深め」るものだと言われています。悲しみを通すからこそ、見える世界があるのだと。悲しみには大切な仕事があるのです。

（『〈かなしみ〉と日本人』竹内整一）

もちろん、悲しみ方は人それぞれです。号泣する人もいれば、どう表現していいのかわからなくて呆然となる人もいます。涙を流すことだけが、悲しむことではありません。表向きには冷静であったり、明るくしっかりしていても、内面は悲しみでいっぱいな人もいます。外見だけで、周りの者が判断することなどできません。それぞれの悲しみを尊重し、寄り添うしかないのです。

私の尊敬する真宗大谷派の僧侶・宮城顗先生は、「失った悲しみの大きさは、与えられていたものの大きさである」と教えて

くださいました。私はお通夜の席で、いつもこの言葉をご紹介させていただくのですが、本当に多くの方がうなずかれます。

大切な人を失った悲しみの中で、共に過ごした時間を振り返る。その中で、「あんなことも」「こんなことも」と、たくさんのものをいただいていたことに気づかされる。いただいたものに気づかされるからこそ、感謝できる。悲しみを通すからこそ、学び、気づかされ、開かれる世界があるのです。

しかし悲しむとは、同時につらい時間でもあります。そのつらさから目を背け、「こんな思いをしたくない」「悪いことが、続くのは嫌だ」という方向に行くと、亡き人を遠ざけることにもなりかねません。

また時には、悲しみのあまり「あの時こうしておけば」と自分を責めてしまうこともあるでしょう。それが気づきや学びに広がらず、ただ悲しみに留まってしまうのであれば、深まることにはならないのです。

我が子を自死という形で亡くされ、その悲しみの中で『歎異抄』に出遇い、親鸞聖人の教えに歩まれた作家の高史明さん↘

Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words

という方がおられます。高さんには、東京で高校の先生をしておられる友人がありました。その方のお母さんは、故郷の鹿児島で一人暮らし。女手一つで育てられたこともあり、母親思いの方だったので、夏休みになる度に家族で鹿児島に帰り、「お母さん、東京に出て来ないか。一緒に暮らそう」と言われていたそうです。

そんなある夏の日、鹿児島は大雨でした。がけ崩れが起こり、その方の乗った列車が巻き込まれたのです。後には、小学生のお子さん二人と奥さんが遺されました。

その後、高さんが鹿児島に行かれた時、お母さんが訪ねてこられ、「どうして、あの子たちが言うように、東京に行なかったのか。私が行っていれば、あの子が死ぬこともなかっただろう。私が行かなかったばっかりに」と、自分を責めるように言われたのです。

そこで高さんは、あえて、こう言われました。

「いまのその悲しみは、お母さまの立場から亡き子を見ているときの悲しみです。亡き子の方から見られていない。仏さまはお母さんに、どういうお母さんであって欲しいと願っておりましょう。その仏さまからのまなざしを抜きにしては、愛別離苦の悲しみの中に仏さまの智慧を学ぶことはできないのです」と。

（『死に学ぶ生の真実』高史明）

悲しみを通して、亡き方から与えられていたものを深く味わ↖

っていく。そして今もなお、仏様と成られて私を思い、願ってくださっている亡き方と出遇い直していく。そこに、悲しみが深まり、改めて感謝の思いが生まれてくるのではないでしょうか。もちろん、すぐに切り替えることはできません。ゆっくりと、しみじみと時間をかけながら味わうしかないのでしょう。

そこにまた、死さえも亡き方からの贈り物といただける世界が開かれていくのです。人間は必ず死ななくてはならないという厳粛な事実。だからこそ、今ここにある出遇いの尊さ、有り難さ。そして、私たちはどこに向かい、どこに帰っていくのかという問い…。

別れの悲しみを通して、大切なことに気づき「あぁ、亡き方が仏様に成られて、教えてくださったのか」といただけた時、亡き方を仏様と仰ぎ、また別な形で共に生きていく。そんな生き方が開かれていくのだと、教えられるのです。■

極楽寺だよりを送りませんか？

都会に出ておられる子どもさん、お孫さんたちへ。有縁の方々へ。お寺へお申し出下さい。直接郵送します。送り先が増えると、住職はうれしいのです。

近頃は、いろんな情報を気軽に手に入れることができる時代です。ところが、あふれた情報にふり回されてもいます。特に、不安をあおる宗教情報は危険です。また、仏事に関することについても、都会では気軽に相談するところがありません。少しでもお寺を身近に感じ、気軽に相談してもらうためにも、「極楽寺だより」がお役に立つのでは…、などと思っています。どうぞ遠慮なくお申し出ください。

9月の言葉

ある方が、タクシーに乗っておられた時のこと。ラジオから大学の先生の、こんな声が聞こえてきたというのです。

「皆さん、今日は桜をご覧になりましたか？」

もう七月も始まろうかという暑い日でした。「この人、何を言っているのか」と不思議に思いながら聞いていると、その先生は「季節外れの変なことをたずねる人だと、皆さんお思いになられたでしょう。しかし、桜は花を咲かせている時だけが、桜ではないのですよ。花満開の時も、葉が生い茂っている時も、その葉を落としている時も、つぼみをつけている時も桜です。桜はずっと桜です。今日も、桜をご覧になってください。懸命に生きる桜を感じてください」と言われたのです。

（『大乗』２０２０年６月号「連研ノートＥ＋」加藤真悟）

考えてみれば私たちも、花満開の時だけが人生ではありません。花が散っている時も、悲しみの日々も、落ち込んでいる時も、そのひと時ひと時が人生の大切な時間です。花が散った時でも、私を認めてくれる人がいる。どんな私でも、私の人生を見守っていてくれる人がいる。そんな人がいるかいないかで、人生は大きく違って見えるのではないでしょうか。

２０２０年８月、俳優の渡哲也さんが亡くなられました。渡さんを「兄貴」と呼び、五十年近く友情を育まれたのがタレント・みのもんたさんです。みのさんは、「渡さんは、芸能人とかなんとかじゃなく、人間として付き合ってくれた。僕が芸能の仕事でもてはやされている時も、一人になっても付き合ってくれた人。やさしくて、男らしくて、実のある人でした」と言われていました。

（デイリースポーツ２０２０年８月15日）

みのさんは、『おもいッきりテレビ』『朝ズバッ！』といった情報番組や、ＮＨＫ『紅白歌合戦』の司会を務めるなど、一時期はテレビで見ない日がないほどの人気者でした。ところが、セクハラ疑惑騒動や息子さんの不祥事で叩かれ、仕事は激減。近頃は、ほとんど見ることがありません。

人気絶頂で花満開の時には色んな人が近づき、もてはやしますが、落ち目になり花が散ると雲の子を散らすように去っていきます。しかし渡さんは、どんな時でも付き合ってくれた。肩書きではなく、人間として、一人の友人として寄り添ってくれた。みのさんは、そんな人と出遇えたことを感謝しておられたのです。

花が咲いている時も、咲いていない時も、調子が良い時も、悪い時も、一人の友人として、一人の人間として付き合ってくれる。認めてくれる。受け止めてくれる。そんな人がいるかどうかで、私たちの人生は、まったく違うものになるのです。

しかし、そんな友だちや例えば家族であっても、人間である限り必ず別れなくてはなりません。みのさんにとっても、大切な渡さんを亡くされた喪失感や虚しさは、本当に大きなものだと思います。そんな悲しい事実を抱えている私たちを、生と死を超えて共にいてくださる方がある。花咲く時も、散った時も、いつも支えてくださる阿弥陀様という仏様がおられるのだと、親鸞聖人は教えてくださいました。そして、阿弥陀様のお浄土に生まれられた亡き方も、仏と成り私たちに寄り添ってくださ↘

Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words

っているのだと。

『大無量寿経』には「もろもろの庶類のために不請の友となる。群生を荷負してこれを重担とす」とあります。「不請」とは、請わなくても、お願いしなくてもという意味です。つまり、私がお願いしなくても、気づかなくても、忘れていても、自ら進んで友となってくださる。共に苦しみを背負ってくださるのだと教えられるのです。

その阿弥陀様の呼び声が、「南無阿弥陀仏」のお念仏です。それは、私を一切否定せず、無条件に受け止めてくださる呼び声であり、その呼び声に身をゆだね、安心感の中に人生を歩まれた人々の歴史があるのです。みんなに見捨てられて、一人になっても、阿弥陀様はわかってくださる。一人であっても、独りではない。自分が自分を見捨てても、この私を見捨てない世界がある。そんな世界と出遇い、阿弥陀様と共に生きられた方々の歴史が、今私たちのところにまで届けられているのです。

小学校の教諭として生涯を教育に捧げられ東井義雄という先生がおられます。子どもたちに寄り添い、子どもたちの輝きを見出し、心温まる言葉を数多く残された方でした。また、住職として阿弥陀様のお育てを喜び、お念仏と共に生きられた方でも↖

ありました。

ある日の深夜、東井先生のお宅に電話がかかってきたというのです。「こんな夜中に誰だろう」と受話器をとると、一刻の猶予もならぬという感じの、聞き覚えのない若い男性の声が響いてきます。

「まわり中のみんなが裏切り、見放し、生きる気力を失いました。それで今から、首を吊ろうと思うのですが、ちょっと気にかかることがありまして…」

「何が気にかかるのですか」

「『南無阿弥陀仏』と称えて首を吊ったら、まちがいなく仏さまの国へ往けるのでしょうね」

きっと、東井先生の書かれた本を読まれたのでしょう。ところが東井先生は、その方をどなりつけたそうです。

「ダメです。やめときなさい。あなたのこしらえものの『南無阿弥陀仏』なんか屁のつっぱりにもなるものですか」

と。著作の温かな言葉とは打って変わった厳しさに、戸惑うような弱々しい声が、受話器の向こうから聞こえてきます。

「では、どうすればいいのですか?」

「どうすればいいかって。あなたは、周り中のみんなが裏切り、逆き、見放したとおっしゃる。でも、まわり中のみんなどころか、肝心のあなた自身が今、あなたを見放そうとしているではないですか。あなたまでが見放そうとしているあなたを、なお見放すことができなくて、『つらいだろうが、どうかもういっぺん考え直して、しっかり生きておくれ』と、必死になって叫んでいらっしゃる方のお声が、あなたには聞こえないのですか?」

東井義雄

Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words

「どこにもそんな声なんか…」

「何を言っているのですか!今あなたは激しく、こちらまで響いてくるような音をたてて呼吸しているではないか。その呼吸が、ホラ、今も『どうか考え直して生きておくれ!』と叫んでいるではないか。あなたの胸のドキドキが、『死なせてなるものか!』と、激しく叫んでいるではないか。それがほんとうの『南無阿弥陀仏さまのお声』なのです。本当の『南無阿弥陀仏』にであわなかったら、生きても、死んでも、あなたの人生は空しいのです」

すると、

「何だか、たいへんな考え違いをしていたようです」

と電話が切れました。その声の響きから、自殺はやめにしたのだと確信できた東井先生も、ホッとして、床につかれたそうです。

月々の言葉

みんなに見捨(みす)てられて独(ひと)りになっても、自分が自分を見捨てても、この私を見捨てない世界がある。その世界からの呼び声「南無阿弥陀仏」が、私の心の底から響いてくださっている。阿弥陀様は、いつも私たちの心の中におられるのです。阿弥陀様からの呼び声を受け止め、阿弥陀様と共に生きる。それが、自分の人生を尊(とうと)いものとしていただくことになるのです。■

（『仏の声を聞く』東井義雄）

物でお布施

mono de OFUSE

家庭で眠っている物を、周りの人のために、活かしませんか。下記の物があれば、お寺までお持ちください。

書き損じはがき・未使用切手
未使用テレフォンカード
商品券・ビール券など金券
CD・DVD
ゲームソフト・ゲーム機器
未使用タオル等　バザー品

仏教の精神にもとづき活動するＮＰＯ法人『アーユス仏教国際協力ネットワーク』に送り、海外の難民支援や国内災害の被災者支援に使わせていただきます。

プルトップも、引き続き集めています！

本願寺山口別院に送り、換金した後、県内の福祉施設に寄付されます。

本堂に設置してある回収箱に、お入れください。

ご予定ください

Oshirase

第 57 回三隅地区親鸞聖人鑽仰会法座

期日：9 月 13 ～ 14 日　会場：豊原 宗善寺

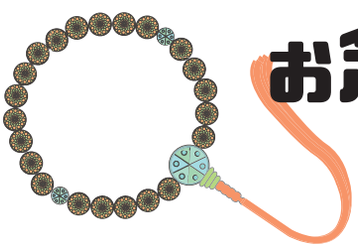
講師：俵山 西念寺 深川宣暢 師

※ コロナ禍の状況により、中止になる場合もあります。

お知らせのコーナー

Oshirase

6 月号でお知らせした、児童念仏奉仕団（7 月 27 ～ 29 日　本願寺・大阪ユニバーサルスタジオジャパン）は、コロナ禍のため中止となりました。来年度も、中止となりそうです。本当に残念です。



お念珠の修理いたします

お念珠のヒモは切れるもの。不吉なことではありません。

お寺で修理いたします。お持ちください。

住職のつぶやき

Jyuusyoku's Tweet

❑ コロナ禍の収束は見えませんが、いよいよ東京オリンピックが始まります。スポーツ観戦好きの私としては、本来であればワクワクする時期のはずなのですが、現状を考えると不安でなりません。本当に大丈夫なのでしょうか。しかし、こんなことを言うと、「反日」というレッテルを貼られるかもしれない…と思うと、これもまた不安です。モチロン、選手を応援することには変わりはありませんが、何とか無事に済んで欲しいものです。❑ さて、先月号でご紹介した「極楽寺 T シャツ」。とても好評で、何と 70 着以上の申込みがありました。もしかすると、住職の強引なススメに仕方なく…という人の方が多いのかも。とはいえ、明るい色から渋めの色まで 50 種類以上の豊富なカラーと、お寺っぽくなくて普段着に着ても違和感のないデザイン。幾度の洗濯にも耐えうる品質など、住職のこだわりが詰まった一品です。サイズは、子ども用の 150cm から XXL までと幅広く、プレゼントにも最適。お渡しするのに二週間くらいかかりますから、暑いうちにいかがでしょうか。一枚 1,000 円のご懇志でお渡しできます。（住職）

次回法座の予定

納骨堂追悼法要　9 月 23 日（木）秋分の日

秋の永代経法要　11 月 8 日（月）9 日（火）

御講師 中島昭念 師（美祢市明厳寺住職）